

# ケイレブ ハーバードのネイティブ・アメリカン

ジュエラルディン・ブルックス 著

オーストラリア生まれ、  
米国在住。作家

つ別な境界が横たわる。

アメリカ最古の伝統を誇る  
知の牙城ハーバード大学。こ  
の名門を1665年に卒業し  
た一人のネイティブ・アメリ  
カン（先住民）の学生がい  
た。この衝撃的な史実に靈感  
を得た著者は、そこから想像  
の翼を大きく広げ、今から3  
00年以上も昔、ネイティブ  
・アメリカンの若者ケイレブ  
が、過酷な偏見を乗り越えて  
ハーバード大学の門をこじ開  
けるまでの苦闘を丹念に描い  
ていく。本作の原題である  
『Caleb's Crossing』の「Cros  
sing」とは「境界を越える」  
の意であり、ケイレブが自ら  
の人種的・宗教的アイデンテ  
ィティを捨て、まさに境界の  
一線を越えて白人文化の中核  
へと身を投じる過程が、本作  
の読みどころとなることは言  
うまでもない。

だが、この小説にはもう一

## 米大学の門を開けた先住民青年

本作の語り手を務めるベサ  
シアは、異教徒改宗の使命を  
負った牧師の娘として辺境の  
島に暮らす中で、ネイティブ  
・アメリカンの少年ケイレブ  
と出会い、二人は兄妹のよう  
に育つ。ところが教化政策の  
一端としてケイレブに大学進  
学の道が開かれる一方、女に  
学問は要らない」という当時  
のアメリカの社会通念に阻ま  
れ、ベサイアにはその機会は  
与えられない。性別の境界が  
彼女の前に立ちちはだかるの  
だ。そしてこの状況をベサイ  
アがいかにして突破するかと  
いうこともまた、本作の大き  
な読みどころなのである。

ケイレブとベサイア、それ  
ぞれの行く末については賛否  
両論があろう。だがそれはそ  
れとして、共に偏見と闘い、力  
の限り境界突破に賭けた若い  
男女の青春物語は、それを読  
む現代人の心に、切なくも爽  
やかな感動を呼び起こさず  
にはおかない。



平凡社・2800円

評者 尾崎俊介

愛知教育大学教授